

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-18

<書評と紹介> 藤岡伸明著 『若年ノンエリート層と雇用・労働システムの国際化：オーストラリアのワーキングホリデー制度を利用する日本の若者のエスノグラフィー』

長峰, 登記夫 / NAGAMINE, Tokio

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

722

(開始ページ / Start Page)

86

(終了ページ / End Page)

90

(発行年 / Year)

2018-12-01

書 評 と 紹 介

藤岡伸明著

『若年ノンエリート層と 雇用・労働システムの国際化

——オーストラリアのワーキングホリデー
制度を利用する日本の
若者のエスノグラフィー』



評者：長峰 登記夫

本書は、従来の労働研究に対し、きわめて刺激的かつ挑戦的な姿勢でスタートしている。

すなわち冒頭の「はしがき」で日本の労働研究は海外の観光業や飲食業、小売業などで働く日本の若者たちを「ほぼ完全に無視してきた」とし、彼らで成り立っている日本の若者の国際移動や雇用・労働システムの国際化などは「既存の研究領域からことごとく軽視または排除されてきた」とする（4～5頁）。

そのことは終章でも確認され、上述のような実態を無視することによって、日本の労働研究は「内向き状態」に陥っており、それを問題視することが本書の研究の出発点だったとする（434頁）。では、その意図するところはどうか。それを簡単に見てみよう。

本書の章構成

まず、本書は500ページに上る大著であり、その章構成は以下のようになっている。

序章 若年海外長期滞在者を考察する意義

第1部 ワーキングホリデー制度——理念、運用、利用者の概略

第1章 ワーキングホリデー制度と日本人利用者の概要

第2章 豪州ワーキングホリデー制度と日本人利用者の概要

第2部 閉塞状況への打開策・対処法としての海外滞在

第3章 豪州ワーキングホリデー制度の利用者増加を促進する諸要因

第4章 ライフヒストリー分析（1）

第5章 ライフヒストリー分析（2）

第3部 日系商業・サービス業と国際横断的な雇用・労働システム

第6章 日本企業の豪州進出と就業機会の増大

第7章 日本食産業における就業状況

第8章 日本人向け観光業における就業状況
終章 まとめと展望

補章1 インタビュー調査について

補章2 日豪関係史の概略

本書は、日本の若者の海外における就業状況について行った研究の一環として、オーストラリアへのワーキングホリデー（本書に従って、以下WHと略す）渡航者の就業状況をとりあげ、インタビューをもとに行った調査研究である。

インタビューは、日本国内および調査対象となったオーストラリアでなされているが、インタビューを通じたWH渡航者の追跡は徹底している。インタビューはホバート、ダーウィン、キャンベラを除く各州の州都（シドニー、メルボルン、パース、ブリスベーン）を中心に地方でも実施されている。現地の英会話サークルや

マリファナ臭の漂う怪しげなパーティにも顔を出して、対象者との接触を試みているようだ。当事者へのインタビューだけでなく、その期間は定かではないものの、著者自身がWHを行い、WH渡航者と一緒に仕事をして、生活をするという徹底ぶりである。

まるでワーキングホリデーの百科事典

本書では徹底したインタビューを行い、また、その前提として幅広くWHに関する情報を収集し、議論を展開している。一読して得られる印象は、まるでWHの百科事典の様相を呈しているということである。

それを章に従って順に見ていくと、まず序章では、なぜ、日本の若者たちがWHで海外に出て行くのか。背景には、一方には、国内の就業環境の悪化があり、他方では、日本企業の海外進出に伴って日本人を必要とする国境横断的な労働市場ができあがっており、そこに若者たちが組み込まれているとみる。

そのなかで、高校や大学を卒業して日本的な長期雇用、年功賃金のもとで安定的なキャリアを積み重ねていく標準的なキャリア形成が困難な、多くは高卒の不安定就業に就いているノンエリート若者たちがいて、そこから離脱する一手段としてWHを利用し、海外に出て行っているとする。

続く第1章では、著者がインタビューを遂行するオーストラリアを中心に、各国（オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、その他）のWH制度の概要と日本人利用者について述べている。その数は1980年代後半から伸びはじめ、1986年に2,000人台だったものが2008年には20,000人を超え、その約半数は渡航先がオーストラリアであった（98頁）。

そしてWH渡航者は、序章で触れたようなノンエリートの海外長期滞在者（といっても基

本は1～2年）であること、1990年代以降国内で就業環境が悪化しその影響を受けた若者グループであること、満足に英語を話せる人も少なく、したがって日本語で仕事ができる、海外にある日系の商業やサービス業で働くことが多いことなどが、その特徴として指摘されている。

第2章では、第1章で展開した議論をよりオーストラリアの雇用・社会環境に照らして、オーストラリア側と日本人の若者の側からより詳細に検討している。オーストラリア側には、観光業推進策（観光客獲得）の一環として、未熟練労働者の不足を補う手段として、あるいは教育産業振興策（語学学校の生徒獲得の手段）、農業における人手不足対策の1つとしてWH制度を利用するという事情がある。日本の若者たちのWH渡航者がこれらの産業とどう関わっているのかを見ている。

第3章では、WHの増加を促した要因を3つに分けて整理している。すなわち、日本国内における就業環境の悪化や晩婚化などWHを利用する側、彼らを送り出す側の要因（プッシュ要因）、あるいはオーストラリア在住の日本人や現地の人々を対象にした日系の商業・サービス業の発展や農業における人手不足、語学学校の学生集めなど、オーストラリア側の社会・経済事情など受け入れ側の要因（プル要因）、そして斡旋業者による紹介サービスや格安航空券の普及、インターネット等のメディアによる情報へのアクセスのしやすさ、海外渡航への考え方の変化等（媒介要因）を挙げて、WH渡航者の増加に影響を与えた周縁的要因を整理している。

ここまでが理論的ないしは次章以降のインタビューを実施する上での前提的研究である。それによると、これらの様々な要因によって、多くの日本の若者たちがWHを利用して渡豪するようになったとする。

以上に基づいて、第4章、第5章ではWH渡

航者たちのインタビューを通し、彼らの実態を探っていく。ここで著者は WH 渡航者を以下の4類型、すなわちキャリアトレーニング型、キャリアブレイク型、キャリアリセット型、そしてプレキャリア型に整理して考察している。

キャリアトレーニング型は専門的な技能や資格、職業経験があり、その経験をいっそう高めるために海外の新しい環境でも経験し、あるいは職業訓練を受け、帰国後の再就職にそれほど困らないようなタイプである。キャリアブレイク型は、専門的知識や資格、職業経験があるという点ではキャリアトレーニング型と同じであるが、あえて日本での仕事経験にこだわらず、未知のことを体験しようというタイプである。

これらに対してキャリアリセット型は、前2者が持っているような仕事上の専門知識やビジネス社会で通用するような経験を持たず、したがって帰国後の再就職にも困難があり、往々にして非正規雇用に入って行きがちなタイプである。プレキャリア型は、未だ本格的な仕事キャリアをスタートさせていないタイプである。

このような類型化に沿って、第4章ではキャリアトレーニング型、キャリアブレイク型、第5章ではキャリアリセット型について、インタビューを通して WH 渡航者たちのライフヒストリーを叙述している。以上の類型化によって、従来社会学や教育学などの分野でなされてきた単発的な調査や新聞などのメディアによる報告を整理できるようになり、WH 渡航者の実態がかなりわかりやすくなった。それが、本書が日本の WH 渡航者たちの実態を知る上で学術的に最も貢献した点であろう。

以上に基づいて、オーストラリアにおける WH 渡航者の実態を見るために、第6章では日本企業のオーストラリア進出の実態と日本人の雇用機会の増大について、第7章では WH 渡航者たちの一大雇用者となっている日本食産業

の現状について、さらに第8章では同じく観光業の実態について検討している。そして、終章は、以上の議論のまとめの章となっている。

終章を終えたあとの補章1ではインタビュー調査の方法論について考察し、補章2では、WH 制度、およびそれを利用する日本の若者たちを理解する一助として、日豪両国の関係史の概略を紹介している。

以上が本書の概要であるが、ここで2つの論点を取りあげ見てみたい。1つは何かと批判が多い WH の利用およびその評価についてであり、もう1つは、オーストラリアの雇用制度に対する理解がないことをいいことに、日本の若者たちが、現地で都合よく低賃金労働者として使われていることについてである。

WHの評価

WH 渡航者はときに窃盗や詐欺、交通事故、麻薬など様々な問題を引き起こし、あるいは捲き込まれる事態も起こっている。また、こうした事態をとらえて、WH を否定的に評価する人も多いことを紹介している（第1章第3節）。

しかし、この問題を考えるとき、著者が提示した WH の4類型が役に立つ。すなわちキャリアトレーニング型やキャリアブレイク型に属する人たちは、技能や職業経験があり、目的も比較的是っきりしていることを考えると、オーストラリアでの経験を帰国後の職業生活に活用していくものと思われる。おそらく否定的な見方につながるのは、キャリアリセット型とプレキャリア型であろう。高校生や大学生が1週間か10日の語学「留学」をする場合でも政府は気前よく補助金を出す昨今、プレキャリア型は今後も増えていくのではないか。10日ほどのホームステイで、行けば何とか生活できることを覚え、軽い気持ちで行ってみようかということになる。ただ、これはまだキャリアのスター

トを切る前のことであり、ここでは触れない。これには著者もほとんど触れていない。

評価が分かれるのはキャリアリセット型であろう。これについて著者は次のように言う。彼らは「しばしば永住者、報道関係者、研究者などから『目的意識の欠如』と批判され……」ているが、「現実には生起している現象の構造的背景や因果関係の理解という観点から見れば、これらの『批判』や『小言』があまり的を射たものではないことも明かである。」その理由として、長期展望もないのにWHに行っているという点が問題視されていることをとりあげ「長期展望を持ってないからこそ、あるいは長期展望に変化を与えるために、WH制度を利用しているのが現状だからである」として、キャリアリセット型のWHを擁護している(276頁)。

しかし、インタビュー結果を読んでもそうした見方を支持する内容はないというのが正直な印象であり、国内の労働市場が厳しい状況にあることと、帰国後の見通しもないままでWHを利用して若者が海外に出て行くことに関連はない。あまりにも安易に一時的に日本社会から逃避する若者たちが多いことも事実であろう。また、長期的な展望云々というためには、WH体験が帰国後のキャリアにどう影響したかがわからなければ評価のしようがない。本書でも紹介しているように、過去の調査によると、帰国後非正規雇用に就く人が多いというのが実態のようである。ただ、WH利用者たちが帰国後どうなったか、それが本書に欠けていることは著者も意識している(435～436頁)。これは調査の仕方からいっても難題だと思われるが、ぜひ今後の課題として期待したい。

日本人を搾取するのは日本人？

評者はオーストラリアの大学で労使関係を学んだが、当時教員たちが冗談半分、本気半分で

言っていたのは、日本人を搾取するのは日本人、中国人を搾取するのは中国人、ということであった。それは本書のテーマになっているように、日本人は現地の日本企業で働き、中国人は現地の中国企業で働くことが多く、しかもそれらのいわば民族系企業はその多くが中小零細企業で、労働組合の目が行き届かない領域でもあり、しばしば違法行為がまかり通る場でもあったからである。

アジア系ほどではないにしても、同じようなことはイタリア人やギリシャ人が経営する企業でも起こり、それは多民族国家オーストラリアならではの事情でもある。評者の滞在中(1980年代半ばから90年代半ばにかけて)は中華料理店の留学生酷使(違法な低賃金での長時間労働)がテレビや新聞などでとりあげられ、何度か社会問題となっていた。

本書では、正社員、非正社員、正規雇用、非正規雇用という区分けがなされ、WH渡航者は多くの場合後者に該当する。これは現地の日本企業、とくにWHビザで若者たちが働く日系の中小零細企業で使われていることを反映したものと推測される。しかし、オーストラリアには正規、非正規という区分は存在しない。あるのは労働時間でみるとフルタイムとパートタイム(週の労働時間が35時間以内)、カジュアル(casual、週の労働時間が16時間以内)であり、契約形態としてみれば、日本的にいうと期間の定めのない雇用契約(パーマネント permanent contract)、任期付き雇用契約(fixed term contract)、臨時雇用契約(casual contract)である。

このなかで臨時雇用は法的な概念ではないが、日常的に使われており、それは雇用を管轄する公正労働委員会(The Fair Work Commission)でも使われている。WHで働く若者たちはパートかカジュアル(おそらく多くは後者)だと思

われる。問題は雇用する側が日本的に正規、非正規として、後者の賃金を低く設定していることである。公正労働委員会のホームページを見ると、自分の職種や産業、経験などを入力していくと、自分の時給や給料がわかるようになっている^(注)。

これに従ってたとえば、20歳、新人、レストラン、ウェイター等の条件を入れて時給を見ると、フルタイムとパートタイムは18ドル93セント（\$1 = ¥100で計算すると1,893円）、カジュアルは23ドル66セント（同2,366円）となっている（交換レートは現在82円程度であるが、本書が対象にしている時期は約100円だったと思われる）。つまり、フルタイムとパートで時給に違いはなく、最も雇用が不安定なカジュアルの時給が最も高い。

非正規雇用の方が正規雇用よりも賃金が安いといって日本の若者たちを雇っているとすれば、やはり日本人が日本人を「搾取」していることになる。ちなみに、なぜ臨時雇用の方が時給が高いのか。これは伝統的なオーストラリア

的公正（fair-go）の考え方に基づいており、臨時雇用は雇用が不安定で、かつフルタイムやパートが享受できる年休や病気休暇等への権利がないかわり、彼らより時給で20%以上の賃金上乘せが義務づけられているからである（これをカジュアル手当 casual loading という）。

いずれにしても、WH渡航者たちの日系企業での雇用には問題がありそうだが、本書がこうした日本の若者たちの実態把握に大きく貢献したことは間違いない。

（藤岡伸明著『若年ノンエリート層と雇用・労働システムの国際化——オーストラリアのワーキングホリデー制度を利用する日本の若者のエスノグラフィー』福村出版、2017年2月、496頁、定価7,500円+税）

（ながみね・ときお 法政大学人間環境学部教授）

（注）最低賃金の概念が日本とは異なるので、簡単には比較できない。それについては以下の拙稿を参照されたい（「オーストラリアの最低賃金」『世界の労働』57巻11号、2007年11月）。